直言

人を大切にすることで選ばれる病院へ 患者さんも職員も「行くのが楽しみに」

皆で楽しく・笑顔・挨拶が病院の力になる

成田富里徳洲会病院（千葉県）院長 堀 隆樹（ほり たかき）



2025年11月に成田富里徳洲会病院の院長に就任いたしました。当院は15年に開院し、10周年という節目を迎えましたが、私は13年から千葉県内の徳洲会グループ病院である千葉西総合病院に勤務し、成田富里徳洲会病院の開院当初には外来診療も担当していました。そのようなご縁のある病院で、院長という大役を担うこととなり、大変光栄に感じています。

着任して10カ月と、まだ間もないため、現在、病院の現状を分析しているところですが、当院は敷地規模が大きく余裕があるため、今後さらに病床を増やせる可能性を秘めています。新たな病棟を稼働させ、より多くの地域の患者さんを受け入れられる体制を整えることが、自分に課せられた使命だと考えています。

その実現には、病棟で活躍する看護師や病院全体の診療力を高める医師など、人材の確保が欠かせません。当院は医療設備が充実しているからこそ、これからは「人」への投資を何より大切にしていきたいと思っています。

人が集まる病院にするためには、職員一人ひとりが協力し合い、楽しく働ける職場づくりが重要です。学校へ行くことを楽しみにする子どものように、患者さんも職員も「行くのが楽しみになる病院」が私の理想です。

以前、鎌ケ谷総合病院で院長を務めていた際、離職を減らし、職員に選ばれる新たな病院になるためには、何が必要かを考えました。院内ですれ違う人が笑顔で挨拶を交わす病院と、声を掛けても反応が少なく、雰囲気の重い病院とでは、どちらで働きたいと思うか、明らかです。

“患者ファースト”は職員を大切にすることから始まる

そこで、鎌ケ谷総合病院では、挨拶を大切にする文化づくりに取り組みました。最初は練習から始めましたが、続けるうちに自然と言葉が交わされるようになり、職員同士の関係も良くなりました。その変化は患者さんにも伝わり、「またこの病院に来たい」と言ってくださる方が増えていきました。また、院内の吹奏楽クラブなどの活動を通じ、職員同士が交流する機会も設けました。私自身も演奏に参加し、職員と気軽に話し、一緒に楽しめる時間を大切にしてきました。成田富里徳洲会病院でも、こうした交流の輪を広げていきたいと考えています。

私は、“患者ファーストは職員が守られてこそ実現できる”ものだと考えています。病院は病気を治療するだけではなく、患者さんの心にも寄り添い、心身ともに元気になっていただく場所です。そのためには、まず職員一人ひとりが大切にされ、安心して働ける環境が必要です。

人は無理を続けると、心身ともに疲弊してしまいます。だからこそ、心が壊れてしまう前に手を差し伸べ、「自分は守られている」と感じてもらえる職場でありたいと、私は思っています。職員は皆、病院という家族の一員です。その職員一人ひとりが患者さんや地域の皆さんにも家族のように接し、「あの先生に会うと安心する」、「あの看護師さんに、また会いたい」と思っていただける医療を目指していきます。

これまで培ってきた経験や知識、人とのつながりを生かし、成田富里徳洲会病院の診療体制をさらに充実させるとともに、地域の救急医療にも貢献していきたいと考えています。

当院が立地する千葉県の印旛（いんば）医療圏では住民の高齢化が進んでおり、身体への負担が少ない低侵襲治療の重要性が高まっています。当院は18年に手術支援ロボット「ダヴィンチ」を導入しましたが、26年7月からは消化器外科でのロボット手術も始まりました。また、成田市や富里市など9市町を抱える広い医療圏を支えるためには、ひとつの病院だけではなく、地域の医療機関が互いに連携し、それぞれの役割を果たすことが不可欠です。7月から始まった自院救急車でのお迎え搬送も好評を博しています。

着任後「ありがとう月間」を開始 家族のように温かく迎える病院へ

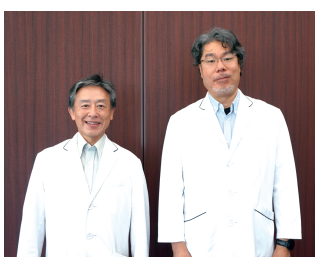
当院着任後は「ありがとう月間」として、朝礼で職員同士が「ありがとう！」を伝え合う取り組みも始めました。感謝の言葉を交わすことで、自然と笑顔が生まれ、職場全体が明るい雰囲気になります。この笑顔と感謝の気持ちを大切にしながら、職員一同、患者さんや地域の皆さんを家族のように温かく迎えられる病院を目指してまいります。皆で頑張りましょう。

湘南鎌倉病院

外科の診療体制を強化拡充

断らない医療と高度な専門性両立

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は、2023年12月に入職した藤井正一・外科統括部長を中心に外科の診療体制を強化している。「すべての患者さんを受け入れる」をモットーにしながらも、上部消化管外科、下部消化管外科、肝胆膵（すい）外科、呼吸器外科、乳腺外科、腫瘍外科と専門性を強化して対応。今年4月には加藤弘・甲状腺外科部長が入職し、甲状腺外科もスタートしている。



「すべての患者さんを受け入れます」と藤井・統括部長（左）、加藤部長



甲状腺の内視鏡手術を行う加藤部長

湘南鎌倉病院外科は、かつての専門性に関係なくに疾患を診るという体制から転換し、すべての患者さんを受け入れながらも、各領域の専門性を極めるという体制づくりを進めている。藤井・統括部長は「断らない医療」という徳洲会グループの理念を基礎に置いていることを強調しつつ、「すべての領域を網羅したうえで、どの分野でも他院に負けない専門性を高め、質の高い診療を提供していきます」と狙いを語る。

専門分化を進める一方で、若手医師の教育にも注力。専攻医や研修医が幅広い領域を経験できるよう配慮し、トップレベルの専門医が指導にあたる体制を構築。また同院では、手術支援ロボットが近く3台体制となるが、若手にも早期から同ロボットを用いた執刀の機会を与えており、専攻医が初めから終わりまで執刀を担当する症例も増加している。

患者さんの治療を進めるにあたり、ロボット手術、腹腔鏡（ふくくうきょう）下手術、開腹手術を病状に応じて柔軟に選択。藤井・統括部長は「手術支援ロボットだけに頼るのではなく、緊急手術も含めて、どんな状況にもチームで最適に対処できるようにしています」と明かしたうえで、「若手育成でも同様に、さまざまな選択肢に対応できるよう、多くの経験を積ませたいと考えています」と力を込める。

また近年は、若手医師が学会で表彰されるなど、指導の成果が徐々に現れている。

多職種連携も活発だ。週1回の消化器カンファレンスに加え、4月に入職した市川靖史・腫瘍外科部長らと、月1回のオンコロジー（腫瘍学）カンファレンスも開始し、医師や薬剤師、看護師が難治症例の治療方針を活発に議論。

さらに、病棟看護師とのコミュニケーション不足を防ぐため、藤井・統括部長自らが病棟の看護師長らと定期的に意見交換する場も設けている。

また、4月入職の加藤部長を中心に甲状腺外科を立ち上げ、傷が目立ちにくい主に腋窩（えきか）からの完全内視鏡手術を新たにスタート。周囲に重要組織が集中する甲状腺の高度進行がんに対しても、呼吸器外科や心臓血管外科などがそろう総合病院の強みを生かして挑む構えだ。加藤部長は「患者さんに最良の治療を提供するためには、専門家としての引き出しを多くもつことが不可欠だと考えます」と意気込みを見せる。

今後について、藤井・統括部長は「地域の開業医の先生や医療機関との顔の見える連携をさらに深め、患者さんを幅広く受け入れると同時に、論文執筆などアカデミックな活動にも若手医師が積極的に挑戦できる環境を整えていきたいです」と抱負を語る。

病気のはなし 231

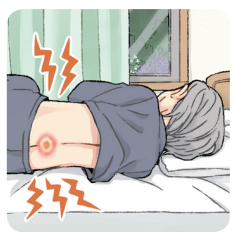
予防策は除圧が第一

寝たきりによる褥瘡

身体が思うように動かず、自身で寝返りがうまく打てなくなると、体圧で皮膚組織が障害され、とくに背や尻、仙骨部などの骨が皮膚近くに出ている箇所に褥瘡（じょくそう）ができやすくなる。初期の褥瘡は皮膚が赤くなる程度だが、重症化すると筋肉や骨が露出してくる。

重症化し筋肉や骨まで損傷すると、感染する可能性も高く、「褥瘡は見つけたら速やかな治療が必要です」と南部徳洲会病院（沖縄県）の外間美智代・看護部長（皮膚・排泄（はいせつ）ケア認定看護師）。在宅医療が整備された現代では減ってきているが、昔は褥瘡が原因で死に至るケースも少なくなかったという。

予防の第一は、まず除圧。体圧が1箇所に長時間かかり続けることがないよう、体位変換したり、除圧マットレスを使用したりする。「最近は自動で体位変換してくれるマットレスなどが出ており、2時間に1回推奨されている体位変換が、4時間に1回ですむなど介護者の負担軽減対策も進んできています」と外間・看護部長。「介護用品は介護保険で賄えることもあるため、ケアマネジャーや訪問看護師に相談してみてください」と呼びかける。



また、予防には皮膚を保湿すること、おむつなどの中も蒸れて濡れたままにしないこと、皮膚を清潔な状態に保つことも大切だという。「万が一、褥瘡かなと思う症状が、ご家族などにあれば、褥瘡ケアを行っている医療機関に相談してみてください」（外間・看護部長）。